

INTERVIEW

有限会社井関産業 代表取締役

いせき しげき
井関 繁喜 氏

企画・製造

いせき たつや
井関 達也 氏竹を使ったオリジナル商品を開発。
人と環境にやさしい未来を創る

PROFILE

●井関繁喜

1950年生まれ、村上市（旧神林村）出身。17歳で新潟市の運送会社に就職。5年程勤めた後、土木建築関連の会社へ。その後、包装資材関連の会社、発泡スチロールを製造販売する会社で経験を積み、個人で起業。1989年、有限会社井関産業に商号を変更する。

●井関達也

1976年生まれ、新潟市出身。専門学校を卒業後、家業である井関産業に入社し包装資材の配送から始める。3年前より商品の企画・製造部門を担当。現在は、竹の性能を活かした商品企画・製造・販売を行う会社「エシカルバンブー」の新潟営業所所長も務めている。

平成元年創業の井関産業は包装資材を主力製品に、間伐材を活用した商品の製造販売、障がい者支援に繋がる商品製作など、「人と環境にやさしい」をテーマにした取組を行っています。井関社長と息子の達也氏に、現在力を入れている事業について伺いました。



有限会社井関産業

〒950-0813

新潟市東区大形本町 6-18- 7

TEL : 025-250-3825

<http://www.iseki-sangyo.com/>

これまで事業を続けてこられたのは、
何よりも人脈に恵まれていたから。
人と人との繋がりというのが商売に
は一番大事だと思います



竹粉、キノコの廃菌床、
海底ミネラルをミネラル
酵素で熟成発酵した
「竹一番ミラクル」は、
新潟市の家庭用ごみ処
理器の基盤材に採用。
竹粉、カニ殻をミネラル
酵素で発酵させた
「竹カニ合戦」も高評
価を得ている。

竹の端材を何かに使えないか。 粉碎機と出会い商品化に着手

井関産業は、発泡スチロールや段ボールなど食品用包装資材・梱包資材の販売を主力に、放置竹林材を使用した竹製品、障がい者就労支援施設に一部製作依頼をする木製品など、さまざまな商品^{ちくふん}を製造。その中でも力を入れているのが竹粉を使ったオリジナル商品だ。

そもそも竹を扱うきっかけとなったのは、「お客さんから“竹の食器ができないか”と言われたのが始まりです」と井関社長。そこで佐渡の業者とともに試行錯誤し、約3年かけて商品化する。「ただし、竹の良い部分だけを使って食器を作るので、葉っぱや枝を含めた端材の処分に困っていました。これを何かに使えないかと考えていたのですが、たまたま知り合った機械屋さんから竹を粉碎する機械を紹介してもらい、“これだ！”と思いました」。

竹とカニ殻を完熟発酵させた 環境に優しい土壌改良資材を実現

そこで同社は荒廃する竹林を間伐した竹を使い、機械で粉碎した竹粉を肥料として販売するとともに、竹粉を発酵させた微生物土壌改良資材の開発を始める。当初は竹を発酵させることに苦戦したが、優良な酵素を入手できたことで「竹一番ミラクル」が誕生。さらに、「カニ殻を入れてみると明らかに土壌のレベルが上がったのです。そこで取引のある水産会社から、廃棄する大量のカニ殻を仕入れることにしました」と達也氏が話すように、カニ殻が持つキチン・キトサンなどの効果が

加わった「竹カニ合戦」が完成する。両商品とも土に入ると微生物が活発化して土壌が良くなり、根から栄養をたくさん吸収するので、丈夫で美味しい作物を育てることができるという。「資源を無駄にしない。素材を大事にするということをモットーにしてきました。包装資材は価格競争になりますが、自社商品は自分で価格を決められる。こうした商品を手掛けていかないと、これからは生き残っていけないと思います」と井関社長は話す。

自社商品のペレット化と 全国を視野に販路拡大を進めたい

昨年は新潟商工会議所からの要望を受け、新潟まつりの「水上みこし渡御^{とぎよ}」に使う大量の竹を手配するとともに飾り付けなども協力。今年からは使用後の竹の処分も行う予定で、その際に出た竹粉は製品に利用するという。

現在は、ネギ栽培に特化した土壌改良資材のOEM製造が主力となっているが、今後は「竹一番ミラクル」と「竹カニ合戦」の製造・販売に力を入れていく。「そのためにも資材をペレット化して、もっと使いやすくしたいです。そして全国を視野に、どのように販路を拡大していくかを考えていきたいと思います」と達也氏。SDGsに繋がる「人と環境にやさしい」同社の商品が、どのように広がっていくのか注目していきたい。



徹底した温度管理のもとで発酵熟成した資材は、冬は約60度、夏は70～80度になるという。この土壌改良資材を使うと微生物の力によって土が元気になる、安全かつ味の良い作物を作ることができる。



洗剤や消臭剤、タオルなど、竹を使った商品の販売も手掛ける同社。竹が持っている無限の可能性を多くの人に知ってほしいという。